

「神 妙」

4月早々に、皆さんの先輩（同窓生の方）が南高にいらっしやいました。県立学校の校長先生を務められた方で、教育に造詣が深く、御自身も教員として長年、生徒と共に汗を流し、いまだに教え子の皆さんからとても頼りにされ、親しまれている方です。

その方が、書道教室にある「神妙」という扁額について説明してくださいました。その額は、その方が南高で書道を教わった先生にいただいたもので、自分だけのものにしておくには、あまりにも貴重な作品なので、南高の書道教室に御寄附いただいたということです。

さて、「神妙」という言葉には、どういう意味が込められているのでしょうか。辞書的な意味は、①「不可思議なこと」②「けなげ。殊勝」③「すなお。おとなしいこと」となっていますが、この「神妙」という言葉は、江戸時代の剣豪、柳生宗矩の『兵法家伝書』の中では、「『神』内にありて、『妙』外にあらわる。名づけて神妙となす」という一節に出てきます。「内側にしっかりした自分の核となるもの（それは「志」や「信念」や「精神力」など）をもって、はじめてすばらしい技を発揮できる。技術の裏付けとして、心が育ってなければ、試合の場ですばらしい技術を出すことはできない」ということを述べて

いるのだと思います。柳生宗矩はこうも述べています。「試合に臨み、心が乱れた状態を病という。」「勝たんと一筋に思うは病なり。係ろう（先に仕掛けよう）と思うも病なり。待たん（相手の出方を待とう）と思うも病なり。日ごろの習いのたけを出さんとするも病なり。ひとすじに心の固まりたることこそ病なり。」平常心が乱れた状態を病とし、それは、「勝たなければと思うこと」「先に仕掛けようと思うこと」「相手の出方を待とうと思うこと」「普段の練習の成果を出そうと思うこと」つまり、「心が何かにとらわれていることが病だ」としています。

「心がとらわれないこと。心を無にして、相手の出方に対して柔軟な対応ができる準備をしておくこと、それが平常心を保つということだ」と説いているように思われます。執着せず、かつ動じない、柔軟性に富んだ強い精神もまさに「神」に通ずるものであり、この「神」が人の中に育っていれば、すばらしい妙技「妙」が外に現れると教えているのです。

柳生宗矩は、剣の達人として「神」の重要性を説いているわけですが、これは、現代に生きる皆さんの様々な場面にも応用できる「極意」ではないでしょうか。スポーツ競技の大会にも当てはまりますし、文化部活動の発表会にも言えることですし、人生をかけた入学試験や入社試験のときにも活用したい「極意」です。心を乱れさすものを捨て去り、「心を無にして、

平常心を保つ」ことができれば、日頃鍛えたもの、それは、技術であったり、学力であったり、人間性などの魅力であったりするわけですが、それが表に出て、結果として勝利を収めるといことです。そのためにも、日頃から、「自分というもの」をしっかり築き、精神力を鍛えよということでしょう。

様々な経験をして、辛いこと、苦しいことを乗り越えていけば、精神力は鍛えられます。心を耕し、豊かにしていけば、自ずと平常心を保つことができる場面が増えてくると思います。人前で話すことが苦手な人も、話す経験を積めば、平常心で臨むことができるようになるのと同じです。高い志を持てば、自分の生き方や考え方もより確かなものになっていくでしょう。そして、努力を重ねることによって達することができる、「もうここまで頑張ってきたのだから、結果は天に任せよう」という境地も、「神」に通ずるもではないかと思えます。「もうここまで頑張ってきたのだから」と思える自分を、ここ「南高」で創り上げていきましょう。